



追いつかれた逃亡者

■ 玉村 豊男

私がパソコンで原稿を書きはじめたのは、54歳のときである。

物書きになってから27年、それまでは原稿用紙に万年筆で書いてきた。

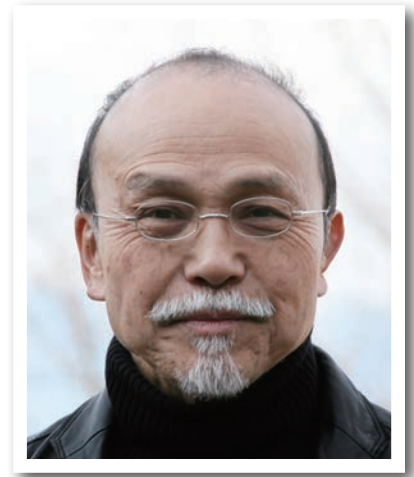
50歳を過ぎる頃から、文筆業界でもデジタル革命は着実に進行していた。が、いずれ将来はインターネットを介して「書き手」と「読み手」の区別がなくなり、印刷術の発明によって成立した物書きという職業も消滅するに違いない、と想像することはできたが、おそらく自分が現役でいるあいだは大丈夫だろう、少し早く生まれたおかげでタッチの差で逃げ切れた、と楽観していたのである。しかし、敵のスピードはあらゆる想像を超える早さで、逃亡者はあっというまに追いつかれた。

パソコンのキーボードに慣れると、原稿を書くスピードは飛躍的に上がった。何時間でも腱鞘炎を気にすることなく書き続けることができ、執筆の途中で参考資料が見たければその場ですぐに検索することができるのは夢のようだった。インターネットが使えなかった時代は、わざわざ東京まで図書館や古本屋に参考書を探しに行ったものだ。

私は文明の利器を手にするるとたちまち夢中になった。生涯手書き派宣言はどこへやら、海外出張にもパソコンを持ち歩いてモバイル通信に凝り、ホテルの部屋の壁から電話線を引き

■ 玉村 豊男
エッセイスト・画家・農園主・ワイナリーオーナー

1945年10月8日東京都杉並区に、画家玉村方久斗の末子として生まれる。都立西高を経て、1971年東京大学仏文科を卒業。在学中にパリ大学言語学研究所に2年間留学。通訳、翻訳業を経て、文筆業へ。著書『食の地平線』『グルメの食法』など多数。最新刊は『食卓は学校である』（集英社新書）。
Web ページ：www.villadest.com



出して無理やり接続したり、何時間も送信を試みているうちに何十万円の通信料を請求されたり、さんざん馬鹿なこともやった。

しかし、デジタル歴が10年を過ぎる頃から、追いつかれて以来集団と並走してきた逃亡者は、そろそろリタイヤして後方に退こう、と考えるようになった。

このまま、もっと情報を、もっと交信を、と叫びながら狂奔するランナーたちと肩を並べて走っていたら、肝心なものを見ないまま、疲れて死んでしまうのではないだろうか。

これからは、その集団から離脱して、本物の自然や生身の人間を相手に、余分な情報に耳を塞いで生きることになろう……。

そう、決心して、私はパソコンを持ち歩くのをやめ、発売と同時に買ったiPadは人にあげてしまった。かつての「追いつかれた」逃亡者は、いまは「古い疲れた」落伍者として、情報の嵐の中で静かな晩年を過ごすことを夢見ている。

